

大山の植物

生態学者たちは大山を希少な植物種の宝庫と呼んでいる。氷河時代の終焉期に本州北部に生息していた植物は南から大山地域に広がった。気温が上がった際にこれらの種は大山周辺の低地では死に絶えたが、山の標高の高い場所で生き延びることができた。今日、大山の植物は日本北部と南部からの種と、高度によって顕著に異なる繊細な生態系バランスとが独自に混じり合ったものである。

山には三つの植生ゾーンがあり、麓部分から大山寺周辺（約 800 m）までのゾーンはチンカピングリ、コナラ、マツ、スギ、クリを特徴とする落葉広葉樹林で覆われている。ここから高度約 1,400 メートルまでは主にブナとミズナラが占めている。1,400 メートルを超えると、登山道の六合目辺りでは高い木は見られなくなり、ヤナギやカエデなどの低木や矮樹種に変わる。大山の山頂近辺の高原には大山固有の変種であるダイセンキヤロボク林が 8 ヘクタールにおよび広がる。日本最大の灌木樹林であるため、1952 年に天然記念物となった。

ダイセンキヤロボクのように、この山が原産の希少な変種植物が他にもいくつかある。初夏には、標高の高い場所に生育する種であるダイセンミツバツツジ、ダイセンオトギリソウ、ダイセンヒョウタンボクの可憐な花々で山頂が彩られる。